
竹林奇譚 第四話 月下

すばる & ぴの子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竹林奇譚 第四話 月下

【Nコード】

N1421P

【作者名】

すばる&ぴの子

【あらすじ】

「人」としてのときをとめてしまった月芳。

虎の姿となった彼は、ふとした予感に目を覚ます――。

第1章（前書き）

こちらのお話は「外伝三 想月」の続編となります。

単体でもお楽しみいただけますが、外伝三をご覧いただいたほうが、人物関係・背景などがよくわかるかと思えますので、ぜひ外伝からお楽しみくださいませ。

第1章

——ねえ、ウォルバン、いつもの話、してくれる？——

あたりは真つ暗な闇。

その中で聞こえてきた声にはつとなる。

もう決して耳にすることはできないと思っていた懐かしい声。

声の主を探し、腕を伸ばした。

闇の中を、光を求めるかのように——。

しかし、どんなに腕を伸ばしても、虚しく空を掴むだけ。

できる限りの声で彼女の名を叫ぶ。

だが、己の声は漆黒の闇の中へと吸い込まれていくだけ。

必死になつてあがく。

（私は……！）

再び何かを叫ぼうとしたところで、ユエファン月芳は目を覚ました。

（夢……か……）

己の腕を見る。

夢とは異なり、今の自分の腕は人のそれではない。

ふさふさとした毛が生えた獣のものだ。

（もう、とうの昔に断ちきつたと思つたんだが……）

かつては、いつもそばで守っていたいと思つていた。あの少女の笑顔を。

張り詰めた空気の中でも、決してめげることなく凜と立つ彼女を、傍らで見守っていたい——時間が許される限り。

そう願っていた。

けれど——……。

その願いはもう叶わない。

自分は人として生きることを捨てたのだから。

だが、こうして夢に見るといふことは、やはりあのときに戻りた

いと、心のどこかで思っているのかもしれない。

（人の匂いがする——）

月芳はのそりと起き上がった。

そうして、目を細め空を仰ぐ。

頭上に広がるのは、満点の星空。

月のない朔の日が月芳は好きだった。

名前に「月」が入っているくせに、と天の邪鬼のような気がしないでもないけれど、月がない晩は、星がいつそう輝いて見える。

普段は見えないような暗い星も見えるような気がするのだ。

そう…普段は月の光に隠されて見えない存在も——。

（この匂いは……）

記憶の糸を手繰る。

この匂いは……どこかで——。

——ウォルバン——

夢の中で微笑んだ少女の鮮やかな記憶が、波のように押し寄せてきた。

フォンユエ

（逢月……）

瞳を大きく見開く。

長い冬の終わりと共に、まるで積もっていた雪が融けだすように、止まっていた月芳の「ひと」としての時間が、今静かに動き出した……。

第2章 1

「あの……すみませーん」

久しぶりの来訪者の声に、学然シュエランはひよいと奥から顔を出した。

（これはこれは……）

ひゅーと口笛を吹く。

庵の入り口には声の主が立っていた。

男物の衣服をまとったその姿から、一瞬少年かとも思ったが、丸みを帯びた体は少女のようにも見えた。

少年にしてはずいぶんと小柄だった。だが、少女だとしたら、なぜ男物の服を着ている？

身につけている服は、決して粗末なものなわけではない。そういったことに無頓着な学然でも、それくらいはわかる。

学然はひどく好奇心をかき立てられて、その人物をつま先から頭のとっぺんまで再度じっくりと観察するように見た。

切れ長の瞳は黒目がちで、まるで磨かれた黒曜石のよう。美しく長い黒髪は頭上で1つに束ねられていた。口元をきりりとひき結び、その姿は凜々しいという言葉がぴったりだ。

年は17、8であろう。だが、その年齢にはふさわしくないほど、どこか悟りきったように落ち着いていた。

「少年」はようやく学然の姿に気づくと、軽く頭を下げた。

「あなたが仙人さま？」

「いや。仙人は……」

「私です」

学然の背後から、いつの間にか姿を現した雲隠ユンインが答えた。

「あなたが？」

「ええ、そう言われています」

雲隠は、人に安心感を与える格別の笑みを浮かべる。

「ようこそ、竹青庵へ。あなたを歓迎いたしますよ」

部屋に通された「少年」は逢月と名乗った。

どこかで聞いた名だと学然は思ったが思い出せない。となりの雲隠を見たが、彼の表情には何も変化がない。もしかしたら気のせいだったのかもしれないと、少年に視線を戻す。

椅子に座った少年は、名乗った後は何も言葉を発しなかった。

ここに来た、ということは雲隠に叶えてもらいたい強い願いがあるはずだ。だが、それを口にすることもなく、ずつとうつむいたままだった。

だが、決して雲隠は少年を急かすことはせず、彼が口を開くまで辛抱強く待った。

「まあ、茶でも飲んだらどうだ？」

学然に勧められて、お茶を口にした彼がようやく言葉を発したのは、学然が入れた三杯目のお茶がすっかり冷めきったころだった。

「仙人さまは、何でも願いを叶えてくださると聞いたのですが…それは本当ですか？」

「ええ」

ただし、と雲隠は付け加えた。

「あなたの大切なものと引き換えに、という条件がつきますが」

「大切な…もの……」

少年は一つ息をつく、顔をすつとあげた。

「私の…願いを叶えてください」

「あなたの願いは何ですか？」

逢月を前に、来訪者に毎回投げかける問いを、雲隠は今回も例にもれず口にする。

「私の願いは……」

彼の声は震えていた。

だが、しっかりと雲隠の目を見て言葉を続けた。

「私の願いは、私が兄から奪ったすべてを兄に返してほしい。『妹』である私が奪ってしまったすべてを……ただそれだけです」

「ちよつ、ちよつと待った！お前さん……女……なのか？」

「あ……は、はい……」

少女の顔はみるみるうちに真っ赤になってしまった。

「学然」

「いや、だって！」

「紛らわしくてすみません」

謝る少女に、雲隠はにこやかに微笑んだ。

「いいえ、悪いのは勘違いをしていた彼です」

言われて学然はうつとなる。

（こいつだって、絶対に勘違いしていたのに違いないのに！）

だが、ここは大人しく反論しないほうが得策だ。

こう見えて雲隠は結構手厳しいのだから。

「ああ、すみません。話の腰を折ってしまって。続きを話してくださいますか？」

雲隠に促されて少女は大きく頷き、自分の身の上を2人に話し始めたのだった。

第2章2

彼女は一国の後継ぎだと告げた。

彼女には兄が1人いた。だが、兄は生まれてしばらくしたころ、隣国に人質として渡された。

しかし、父王は決して兄を取り戻すことをあきらめず、いつか彼が戻ってきたとき、王位を障害なく継げるよう、自分を男として育てたのだという。

つまり、彼女は兄が戻ってくるまでの、いわば身代わりだったというのだ。

そして父王の願いは叶い、祖国の力が増した結果、兄を隣国より取り戻した。しかし、兄は己の出自をまったく知らなかった。自分はずっと隣国の王の実の息子であると思っていた。

その結果……彼は突然つきつけられた真実を受け入れることもできず、自分たちの前から姿を消してしまったのだ、と――。

「兄を追い詰めたのは私です」

フォンユエ
逢月は苦しそうに言葉を紡いだ。

「何も知らない兄に、私は真実をすべてぶちまけてしまったんです。もっと兄を傷つけずにすべてを知ってもらうことはできたはずなのに……」

ずっと、ずっと……彼女は後悔し続けているようだった。

「兄が姿を消してからというもの、父は目に見えて覇気を失っていきました……」

そして数ヶ月前、人払いされた一室で、父王は逢月に告げたのだという。

己の命はもはやもつまい。

だから、完全に尽きる前に王位を譲りたい。

逢月に――。

だが、彼女は女。

逢月の国に、女が国を治めた前例はない。

だから、父王は逢月を「男」のまま、国を継がせようとした。
今までも、そしてこれからも逢月はずっと男であり続けなくてはならない。

周りに決してこの苦しみを悟られることなく、民を欺き、臣下を欺き生き続けなければならないのだ。

迷い。

不安。

足りない覚悟。

現実を目の前に突き付けられた時、それでも逢月はぐっと耐える
しかなかったのだろう。

「父が病に伏した今、王位を継ぐべき者は私しかいませんから。それはわかってるんです。けれど……」

その一方でどうしても兄のことが忘れられない、と逢月は言葉を
絞り出した。

「兄はきつとどこかで生きていると思うんです。兄が死んだという
確証がないのに……このままでは私は王位を継ぐことができない……」

「お兄さんに王位を継いでもらいたいのですか？」

雲隠コンインの質問に一瞬の間があった後、逢月は深くうなずいた。

「本来、王になるべき人は兄です。今、私は継ごうとしている王位
は、兄のために用意されたものです。私は……そのために今まで生
きてきたのですから」

逢月は自分が考えなしの行いをしてしまったがために、兄が国の
王となる機会を失ってしまった、と自分を強く責めているように見
えた。

父の夢も、そして兄が手にするはずだった未来も、すべてを奪っ
てしまったのは自分だと。

「それで、あなたはどうしたいのですか？」

「私の願いはただ一つ。兄が平穏な心で過ごせる場所を作ってほしい。王宮に。彼が本来いるべきだった場所に帰れるように」

父王の命が尽きる前に、と逢月は言った。
シュエラン学然シユエランは小さく息をついた。

それを願うなら、次の雲隠の質問に対して、彼女がどのように答えるのか——それを想像し、心がずんと重くなった。

「では、その願いを叶える代わりにくださる、あなたの一番大切なものはなんですか？」

彼女は微笑むと、言った。

「私の居場所。私の地位。私の人生。私の……命」
(やっぱり…そうきたか……)

彼女の立場を考えれば、それは当然の結論なのかもしれない。
逢月には痛いほどわかつているのだろう。

兄が戻ってくれば、それはすなわち、己の居場所がなくなるとい
うことを意味すること。

いや…なくなるのではない。

居場所を残しておいてはいけないのだ。決して。

王位を継げる人間が2人いるのは、争いの種だ。

ましてや、逢月は長年兄の代わりとして生きてきたと言っていた。
その間にいやでも目にしてきたはずだ。官の政治的な、ときには
暗闇に隠したくなるような駆け引きを。

少しでも兄の治世に障害となるものを残してはならない。

彼女が生きていれば、官に利用されるとも限らない。

逢月と兄が入れ替わった瞬間から、彼女はこの世に存在してはな
らない人間となる——。

兄の生還と引き換えにできるのであれば、彼女は喜んですべてを
差し出そうというのだ。

「私が生きてきたのは、兄が戻ってきたときの、兄の居場所を守る
ためなのですから」

だから、自分の命は惜しくない。そうはつきりと彼女は雲隠の目

を見て答えた。

「——わかりました。あなたの願い…叶えましょう」

そうして雲隠はいつものように「契約」の儀式を行った。

「ねえ、仙人さま」

「？」

儀式を終えた後、彼女はようやく一息つけたようで、ゆっくりとした口調で雲隠に語りかけた。

「私、思うんです。兄がいつも話してくれた虎と熊の娘の話があるんですけれど、兄はまるでその物語に出てくる虎の娘のようなんです」

（まさか……）

ここでようやく、学然の中にあつた小さな突っかかりがすつと取れ、脳裏にある一匹の虎の姿と結びついた。

5年前、この竹林にやってきた1人の少年。

彼が自分たちに話してくれたことは、彼の身の上のことではなく、彼の国に伝わるという物語だった。

彼が話してくれた物語にも、虎と熊の娘が出てきはしなかったか。隣りを見れば、雲隠も大きく目を見開いている。雲隠も気付いたのだ。彼女の兄が誰なのか——。

震える声で雲隠は訊ねた。

「逢月。あなたのお兄さんの名は？」

彼女ははつきりとう答えた。

「ウォルバン。でも…本当の名は月^{ユエファン}です」

名の中に自分と同じ「月」を持つ。

大切な兄です、と逢月は告げた。

第3章

「まさか一国の王女サマがここに来るとはなあ……」

「ここに来るのに身分は関係ありませんよ」

中庭にいる逢月をちらりと見ながら、雲隠コンインは苦笑する。

「ここにたどり着ける条件は1つ。誰にも譲れない強い願いがあるか、ですから」

「ま、確かに……」

学然シュエラン自体は、自分がどんな願いを持つてここに来たのかは覚えていない。気づいたらここにいた。記憶をすべて失った状態で。

ここに来る前、自分がどこにいたのか、何をしていたのか、そもそも自分は何者なのか……きれいさっぱり忘れていたのだ。

唯一覚えていたのは、「学然」という名前だけ。

雲隠に聞いても、願いすら自分は言っていないという。突然庵を訊ねてきた自分はただひとことだけ言つて、その場に倒れたという。「やっと見つけた」

そう言い残して。

次に自分が目覚めたときには、記憶を失った状態だった。

「ここへはなぜきたのです？」

雲隠に問われても、自分のほうこそ聞きたい心境だったのを覚えている。

いったい自分なぜここにきたのだろうか？

「見つけた」という最後のひとは、おそらくこの庵をようやく見つけることができた、という意味だと思うのだが、肝心の目的をまったく覚えていないのだから、なんともまぬけな話である。

だが、ここには叶えてもらいたい強い願いがないと来られない。

学然が竹青庵に居座つてから、雲隠を訊ねてくる人々のことを思い返せば、それが間違いでないということは明らかだ。今までやってきたどの人も、絶対に譲れない強い願いを持っていた。だから、学

然がここに来る時、何か願いを持っていたことは確かなのだ。

「それよりも……彼女が探しているお兄さんとやらが『^{ユエファン}月芳』である、ということのほうがよほど重要です」

雲隠の言葉に、学然は引きもどされる。

「——ああ、そうだな……。どう思う？　雲隠」

「どうもこうもありません」

はあ、と学然は今日何度目かの重いため息をついた。

「やっぱりあいつのことだよなあ」

「おそらくは」

彼がここにやってきた時期を考えると、十中八、九その可能性が高いでしょう、と雲隠も息をつく。

雲隠にしては珍しく気乗りしないようだ。

「いやなら断ればどうだ？」

「それはできません」

学然の言葉に、晴れない顔をとほ逆に雲隠はきっぱりと言い切った。

「なぜだ？　別に全部願いを叶える必要はないだろう？　誰もそれを雲隠に強制しているわけじゃないし、雲隠の義務でもない」

「そういうわけにはいかないのですよ」

「だからなぜなんだ？」

「——それは……それが私の……」

雲隠は途中までいいかけて、そのまま言葉を途切れさせた。

「あまりにも遠い昔の話なので忘れてしまいました」

わざとらしくにつこり笑う。

結局、雲隠は何も教えてはくれなかった。

昔からそうだ。

雲隠は肝心のことを何も教えてくれはしない。

もうずいぶんと長い間共に住んでいる学然にさえ、語ってはくれない。

なぜ仙人になったのか。

なぜこの竹林に住むようになったのか。

ここで雲隠はなぜ人々の願いを叶えるようになったのか。

——見えない影。

それが雲隠には色濃く存在している。

その影が、学然でさえ、雲隠の心の中に踏み込むことを許さない。

（ま、仕方ないか……）

人それぞれ、隠しごとの1つや2つ持っているものだ。

それを無理やり暴こうなどと、無粋なことは考えていない。

話したくなったらきつと雲隠のほうから学然に話してくれるだろう。

それまで学然はずっと待つつもりだ。

なんせ時間はたっぷりあるのだから。ここでは……。

「学然。1つお願いがあります」

「なんだ？」

珍しい雲隠の「お願い」に学然は身を乗り出した。

「決して逢月フタムツに、月芳のことは言わないでください」

「なぜ？」

「——これは月芳自身の問題ですから。私たちが下手に手を出さないほうがいいと思うのです」

「お前、だって逢月と……！」

「彼女の本当の願いが、あの言葉の通りならば叶えますよ。ですが……」

雲隠は顔を曇らせ、小さく息をついた。

「ん？ あの言葉通りって…まさか逢月の願いは違っているのか？」

「——いいえ」

雲隠は首を横に振った。

「彼女はまだ自分の本心に気付いていないだけなのです」

だからこそ、自分たちが下手に口を出すことはしないほうがいい、と雲隠はもう一度念押しをした。

第4章

「——月芳^{ユエファン}、おい、起きろ」

湖のほとりで気持ちよさそうに寝そべっている虎の姿を見つけると、学然^{シュエラン}は思いつきり虎の頭を叩いた。

虎は面倒くさそうに片目を開く。

「——……」

「ほら、雲隠^{ウンイン}から差し入れだ」

そう言つて学然は饅頭を2つ取り出すと月芳の鼻先に置いた。

なんだか自分からの差し入れだというのが照れくさくて、ついといいつも雲隠からだと言つてしまう。

別に月芳は、どちらが作つてきたものだとしても、さして気になどしないであろうに。

学然は月芳の隣に腰を下ろした。

湖面には、東の空から昇つてきたぶつくりと少しばかり膨らんだ月がゆらゆらと揺れている。

水面に揺れる月は、手を伸ばせばつかめそうなのに、いつもつかめない。それはまるで人の幸いのようにだと学然はいつも思う。

目の前に見えているのに、つかめそうなのに、それをつかむことはとても難しくて。ここに来る人間たちを見るとそれを強く感じる人間というものは、なんと不器用なものなのだろう、と。

（俺もそうなのかもしれないけどな）

軽く苦笑する。

きつとそれはこいつも同じだ。

「——で。お前、いつまでここにいつもりだ？」

「——……」

何も答えない月芳に、ふう、と軽く息を落とした。が、次の瞬間、大きな口をあけて饅頭を2ついっぺんに口の中に押し込んでいる月芳を見て叫ぶ。

「お前！ もつと味わえ！」

「味わっている。だいたい少しずつ口に入れるより、一度に入れたほうが味を感じられるだろう」

学然は恨めしそうに月芳をにらみつけてやった。

だが、ふつと眼を細め、真顔になる。

「お前、戻らないのか？」

「なんのことだ」

「もうわかつているんだろ？ 逢月フオンユエが来ていること」

「……」

私はもう人を捨てたのだ、と月芳は答えた。

だから、戻るつもりはない、と。

雲隠に願いを叶えてもらうためにやってくる者たち。彼らは願いを叶えてもらう代償として、最も大切なものを差し出す。

それが雲隠との契約。

だが、そういった者たちと異なり、月芳は雲隠に願いを叶えてもらったわけではないはずだ。

雲隠は、月芳が虎に姿を変えたとき、こう言った。

「ただここの特殊な気の影響を受けたのです」

だからこそ、雲隠は幾度となく月芳に元の姿に戻りたくはないのか、と訊ねている。

雲隠がそういうのだから、きっと戻る術はあるのだろう。

けれど。

逢月から聞いた話からすると、月芳が故郷だと信じていた国はすでにない。

育ててくれた王も妃もおそらくこの世にはすでにいないだろう。

もはや彼は、本来自分が戻るべきだと信じていた場所を失ってしまったのだ。

何より彼は、断固として人に戻ることを拒否し続けている。

「せめて会ってやったらどうなんだ？」

「会ってどうする？ 今の私は人ではない」

身も心も獣になり果てたのだ。

人に戻ることは決してない。

会っても、それは逢月を悲しませるだけで、決して喜ばせることはない。であれば、会う必要はない。

彼はきっぱりとそう答えた。

学然は、今日何度目かの大きなため息をついた。

彼の心を変えることは、自分には決してできない。

変えることができるのであれば、それは唯一逢月だけのように思えた。

だが、逢月には、この虎が彼女の兄だと教えることはできない。

月芳から名乗らないのであれば、逢月が気づくことはないだろう。このまま何もしなければ、お互いを知ることもなく、無駄にときだけが過ぎてしまう。

（つたく、雲隠はいつたいどうするつもりなんだ？）

学然は月を見上げる。

静かに冴え冴えとした青い光を放つ月を――。

第5章

逢月フォンユエが竹林にたどりついてから5日が経った。

逢月は、竹林に来てから何をするわけでもなく過ごしていた。

雲隠コンインは願いを叶えてくれると言ったが、彼が特に何かをしているようには到底見えなかった。

それはまるで、何かが動くのをじっと待っているかのようにも見ええた。

一体どういうことなのか、何度か聞こうとも思ったが、それは失礼かもしれないと思った。

なんせ雲隠は仙人だ。自分にはわからないところで、何かをしてくれているのかもしれない。

だから、しばらく様子を見ることにした。

しかし、逢月にも無限の時間があるわけではない。

ここに来られたのも期限付きのことだ。

あと十日もしたら、ここを出ていかなければならない。

(本当にそれまでに願いを叶えてくれるんだろうか)

もし彼が逢月の知らぬところで何かをしてくれているとしたら、それはただ1つ。雲隠はウォルバンと接触している、ということになりはしまいか。

だが、この竹林に兄がいるようには思えない。

いや、兄どころか、雲隠と学然以外の人間が、ここに住んでいるようには見えなかった。

かといって、逢月は帰るわけにもいかなから、庵にとどまっていた。

内心焦ってはいたが、どうすることもできず、気持ちを落ち着かせるためにも、庵の近辺をぶらぶらと歩く。

王宮にいたときには考えられないことだった。

あそこにいれば、警護のものが重々しい雰囲気でもいつも周りにい

る。

王宮の庭園を散歩するときでさえ、周りには必ず誰かがいる。生まれたときからずっとそうだった。

それが決して当たり前だとは思わなかったが、自分には「自由」を望んではいけないのだと、心のどこかでわかっていた。

それがなぜだかは、幼い頃の逢月にはよくはわからなかった。

だが、父や母の様子からも、決して自分に何かがあつてはいけないのだと悟っていた。

この身は決して自分1人のものではないのだと、そんな気がした。ましてや、いまはその理由もはつきりとわかっている。この身は何ものにも代えることができない。

兄のためにも、国のためにも。

自分の身に何かがあれば、すべてが無駄になってしまう。

これまでの自分の苦労も、そして父の願いも――。

今回、雲隠を探しにくることさえ、かなりの決心が必要だったけれど、できるとしたら今しかない。父の跡を正式に継いでしまえば、今まで以上に自由はなくなる。兄を捜しに自ら行くことなど不可能となる。だから、即位をする前に国を見ておきたい、と父に言い、遊学を口実に王宮を出た。

そうして、警護の者たちの目を一瞬だけ盗んで、ここにやってきたのだ。

逢月にとつては、そのようなことをするのは、生まれて初めてのことだった。

昔、兄ウォルバンと王宮を抜け出したことはあったが、あのときはウォルバンがそばにいてくれた。

まるつきり1人なのは、今回が初めてだ。

きつと今頃王宮は大騒ぎだ。

もちろん、父宛に手紙は残してきた。だが、それでも長い間行方不明になっているわけにもいかない。それこそ取り返しがつかないことになってしまいかねない。

これ以上の無茶はできない。

「大丈夫ですよ、ここは安全ですから」

雲隠にそう言われなければ、こうして散歩をすることもなかったかもしれない。

この日、逢月は夕餉を食べた後、湖の近くにやってきていた。

この竹林はとても不思議だ。

庵に着くまでは、とにかく仙人を探すことに必死になっていて周りをみる余裕もなかったから感じなかった。

だが、こうして何日か庵で過ごし、ここに特別な場所だということを感じた。

この感覚を言葉で表すのはとても難しい。

だが、空気が違うのだ。

しんとした静かな空間。

かといって、動物がいないわけではない。鳥もいる。風の声も聞こえる。それは外の世界と変わらないもののはずなのに。

1人こうして庵の外に出ると、背筋がぞくりとする。それは不快なものではない。むしろ心地よい感覚だ。すべての神経が……そう、周りの自然と一帯になるような感覚に襲われる。

湖面にぼつかりと浮かんでいる大きな月に目をやる。あと数日もすれば、きれいな満月になるだろう。

と、逢月の足がとまった。その視線の先にいたのは……月明かりに照らされた1匹の大きな虎。

虎は大岩に寝そべり、ゆらーりゆらーりと尻尾を揺らしていた。

全身が凍りつく。

虎といえば、人をも襲う猛獣と聞く。

今、自分は死ぬわけにはいかない。静かに気付かれぬよう、逢月は前を向いたまま後退する。

と、揺れていた虎の尻尾が止まる。ゆつたりと体を起こすと、逢月のほうに顔を向けた。そして——虎の視線が逢月にくぎ付けとなった。

逢月もまた、虎から目を離すことができず、その場に立ちすくんでいた。

「――何をしにきた」

しばらくして、低い声がどこからか聞こえた。

逢月はだれか自分以外に人がいるのかと、あわてて周りを見渡したが、己以外の人の姿は見えない。

「どこを見ている。ここだ」

もう一度先ほどの声が聞こえた。

周りをきよるきよるしている逢月の前に、大岩から虎が跳び下りてきて、ぬつと目の前に現れた。

「ひゃあ」

思わず悲鳴にも似た声をあげる。

「――驚かずとも、とって食いやしない。私の好物は人ではない」

ここで、ようやく逢月は、虎が人語を話しているのだと理解した。

「あなたは……神様の遣い？」

動物の中には、神の御遣いであるものもいるという。人の言葉を解することができるということは、普通の動物ではないに違いない。「ただの獣だ。お前の言葉がわかるのは、ここがそういう場所だからだ」

まるで逢月の心を読み取ったかのような虎の答えに、逢月は妙に納得してしまった。

そうか、ここは仙人である雲隠がいる場所だ。きっと動物たちも、逢月の知っている動物たちとは違うのかもしれない。

虎は動けないでいる逢月に、くるりと踵を返すと、もといた岩の上に戻り、その身を横たえた。そして、ふらり、ふらりとしつぱを再び揺らし始めた。

そんな虎の後ろ姿を見ているうちに、なぜか逢月の中で、虎に対する恐怖心が薄れていった。なぜか虎に対して、どこか懐かしさを感じていた。

「隣に座ってもいい？」

逢月はゆつくりと近づくと、虎に訊ねた。

「……」

虎はいいとも、だめだとも言わなかった。

「座るわよ？」

もう一度断ると、逢月は虎の横に腰を下ろした。

虎が本当に何もする気がないのだとわかると、逢月はぼつりぼつりと自分のことを話し始めた。

はじめはただの自己紹介のつもりだった。けれど、隣りにいる虎の気配を感じているうちに、すべてを虎に聞いてもらいたくなったのだ。自分が何者で、なぜここに来ているのかということ。

虎はただじつとそれを隣りで聞いてくれていた。一言も言葉を発することはなかったが、ゆらりと垂れた尻尾が時折、逢月の肩や頭をやさしくなでてくれた。

それが妙にうれしくて。

月が南中し、やがてゆつくりと西に沈み始めるまでずっと逢月は虎のそばで話をした。

別れ際に、逢月は「また来るわ」、そう告げた。やはり虎は何も言わなかった。

けれど、翌日も逢月は日が暮れると湖へと足を運んだ。そこにはやはり虎がいた。

そしてその翌日も。

一人と一匹は日が暮れてからの数刻を共に過ごした。

雲隠も学然もそのことを知っているようだったが、何も言わなかった。

第6章

「兄の件はどうなっているの？」

ここにいられるのもあと数日となったとき、ついにたまりかねて逢月フォンユエ ユンインは雲隠に詰め寄った。

雲隠は、手にしていた書物から目をはなすこともせず、こう答えた。

「真実はあなたの前にすでにあるのですよ」

「どういうこと？」

「これ以上私があなたに言えることはありません」

困ったように傍らで立ちつくす逢月に、雲隠は少しばかり目をやると、ふわりと微笑んだ。

「大丈夫。あなたなら真実を見つけられますよ」

雲隠に言われた言葉を心の中で反芻しながら、逢月はいつものように夜になるとふらりと湖へと足を運んだ。虎に会うために。

虎は湖のほとりの岩の上に寝そべっていた。いつものように。

そこで——逢月は見てしまったのだ。

月明かりに照らされた虎の姿が、湖に映し出され、ゆらりゆらりと波紋を描いていく。と、一瞬ではあるが見えたのだ。——一人の青年の姿が。

その姿を、逢月は決して見逃さなかった。

少し浅黒い肌。

瞳と同じ漆黒の髪。

精悍な顔をした青年の姿には、数年前いつもそばにいてくれたウオルバンの面影があった。

（まさか……）

虎の後ろ姿を咂然としながら眺めた。

これはいったいどういうことなのだろうか。

今見たものがいったい何を示すのか、逢月には理解できなかった。

——真実はあなたの前にすでにあるのですよ——

不意に雲隠の言葉がよみがえる。

彼が言っていたことと、今逢月が目にしたことは関係があるのかもしれない……。いや、彼が言っていたことはこのことに違いない。その瞬間、すべてが確信に変わった。

（兄……さま……）

だが、逢月はその言葉をぐっと飲み込んだ。言ってしまったてはいけない、と心が叫んだ。

逢月は冷静さを保ちながら、いつも通り、ゆっくりと虎に近づいた。

そうして、これまたいつも通り、虎の傍らに腰を下ろす。

「お前も懲りないな」

「だって、あなたは人が好物ではないといったでしょう？」

自分の声が震えていないか、逢月は恐れをいだきつつ、できる限りいつものように応えた。

「私などと話してもつまらないだろうに」

「そうでもないわ。少なくとも俺にいるよりはいいもの」

「そうか。たしかにあの2人と会話するのは、少々体力も精神力も消耗するからな」

愉快そうに虎は笑った。

今日の虎はずいぶんと機嫌がいいようだった。いつになく饒舌だった。

「ねえ…あなたはここにずっと住んでいるの？」

逢月は自分の声がわずかに上ずっていることをどこかで自覚しながらも、虎に訊ねた。

「——虎としての私は、生まれたときからずっとここに住んでいる」

虎の答えに、逢月の確信はさらに強固なものとなった。

さきほど己が目にしたものは決して幻ではないに違いない、と。

「私は……兄に戻ってきてほしいの……国に」

「なぜ？」

「私より兄のほうが……ふさわしいから」

「なぜ？」

「だって、父は私ではなく、兄に継いでもらいたいのだよ！」

「だが、父王はお前に後を継いでもらいたいと言ったのではないのか？」

「それは……」

それは、兄がいなかったからやむを得ず言っただけだ。きっと。兄が戻ってきてくれれば、自分は王になることは絶対にあり得ない。

「私には国を治める王たる資格がない」

「資格？ そのようなもの、お前の兄にもないだろう？ 祖国を捨てた人間だ」

「それは私が……！」

私が兄を追い詰めたから、兄は国を出て行ってしまったのだ。自分が不用意なことをいいさえしなければ、兄は王位につけたのだ。きっと。

逢月は、自分のことをじっと見つめる虎と視線があった。

「お前は何を恐れている？」

父王は逢月に後を継いでもらいたいと言っている。

王たる資格がないのは兄も同じ。

「恐れ……」

虎の問いに、逢月の心のなかで眠っていた言葉が、口からほろりとこぼれた。

「——私は、民を…臣下を欺いたまま王位に就くのが怖い……」

虎はかすかに目を細めた。

「とても苦しいの……。みなに嘘をついていることがとても…苦しい……」

気がつけば、涙が出ていた。

「怖い…… 苦しい…… 私は……」

このまま一生自分が女だということを隠し続けていかなければならない現実。それはつまり、臣下も民をもだまし続けるということだ。

王位を継ぐということとはそういうことなのだ……。

兄のためではなく、自分の居場所を守るために――。

今までは兄のためだと、自分を納得させていた。けれど、これからはそんな言い訳もきかなくなる。すべてを1人で背負って生きていかなばならない。

「逢月」

虎はしつぽで逢月の頭を優しくなでると、そのまま彼女の頭を自分の体にぼすんと押し付けた。

逢月は彼の体にすがりつくと、声をあげて泣いた。今までずっと心の奥底に押さえ込んできた思いをすべて吐き出すかのようになり、思い切り涙を流した後、幾分すっきりした気分になった逢月は、少し照れくさそうに虎の顔を見た。

「お前が雲隠に願うべき本当のことはわかったか？」

逢月はゆつくりと首を横に振った。

「いいえ。私は雲隠さまに願いを口にするのはしないわ」

しゃくりあげながらも逢月はしつかりと答えた。

「この願いは他人に叶えてもらうべきものではなく……自分で叶えるべきものだから」

彼女の言葉に、虎は満足そうに頷いた。

「もう、大丈夫だな？」

涙でぐしゃぐしゃになった逢月の顔を、虎はしつぽでそっと拭いてやった。

「痛みを知っている人間は強い。だからお前なら大丈夫だ。きっと民を導いていける。いい『女王』になる」

ありがとう、とふり絞って虎に言ったが、それがきちんと声とし

て出ていたかは逢月にはわからなかった。

虎はゆったりと体を起こし、彼女の耳元でそつと囁いた。

「さあ、もう国へ帰るがいい。ふるさとへ。お前の民たちが、臣下たちがお前の帰りを待っているだろう」

湖面に映った満月がゆらりと揺れた。

優しい光を受けながら、逢月は深く深く頷いた。

第7章

翌日、月芳はひっそりと姿を消した。この竹林から。行く先は誰にも告げなかった。

きつともう、彼がここに帰ってくることはない。学然にはそう思えた。

逢月はそれを知ると、瞳を伏せてぐつと唇をかみしめたが、泣くことはしなかった。そして、次に顔をあげたときの逢月の表情は、なんとも言い難いほど晴々しく、そこにはもう迷いはないようだった。

「私も帰ります。私がいるべき場所に」

雲隠と学然に一礼をし、彼女もまた竹林から彼女がいるべき場所へと帰っていった。

その後ほどなくして、2人は風の便りに逢月が王位についたと知った。「女王」として――。

彼女は民に、臣下に、真実を告げたのだという。

どんな事情があるにせよ、自分はみなを欺いてきた。そんな己ではあるが、それでも女王としてこの国を守りたいのだと。

民も臣下も彼女を受け入れた。

王位についた彼女は、生涯を国の平穏を守るためにささげ、善政を行ったという。

一方で、雲隠と学然のもとに、月芳の行方をしらせる声は決して届くことはなかった。

彼は最後の最後で、真の意味で「ウォリヤン」になれたのだ。ウォリヤンになれた彼は、もう二度と彼女のもとに姿を現すこともないだろう。

だが、学然は信じている。彼はきつとどこかで生きていると。生きて、大切な逢月を見守っているに違いないと。

風に乗って、雲隠の二胡の音が聞こえてきた。

彼は今日も池のほとりで二胡を奏でる。

切なく、けれどどこか優しく温かい音色を。

きつと……月芳に届くよう、彼の行く末がせめて幸いで満ちたものであるよう、願いを込めて――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1421p/>

竹林奇譚 第四話 月下

2011年1月9日20時26分発行